

校内研究構想 〈R8-9 墨田区教育委員会研究協力校〉

校長 川中子登志雄

研究主題 「生徒の非認知能力の育成」

— 生徒が「主語」の主体的な活動を通して —

1 本校の研究が目指す姿

- 学力の土台となる非認知能力を日々の授業・学校生活の中で育てる
- 教師主導から「生徒が主語」の学びへの転換

2 非認知能力とは

知識や技能（＝普通のテストで測れる力＝「認知能力」）とは別に、学びに向かう姿勢や人との関わりの中で身に付く力

例)

- やり抜く力・粘り強さ
- 自己調整力・振り返る力
- 協働性・他者理解
- 自己肯定感・自己効力感

※ 〈ポイント〉 教え込むのではなく活動・経験を通して育つ力

3 「生徒が主語」となる学びの視点

- ✓ 生徒が「考える」「選ぶ」「決める」場面がある
- ✓ 授業の大部分が生徒の活動になっている
- ✓ 話合いや活動が「目的化」していない
- ✓ 教師は支援・承認・問い返し（＝伴走者・ファシリテーター）役に徹する

- 「主体的な姿」は「遊びに夢中」になっているような姿
 - 生徒の主体的な姿は協働的な活動の中でよく見られる。
 - 生徒が「やらされる学び」から「自分の学び」へ
-

4 2年間の研究の進め方(案)

【1年目】基盤づくり

- ・非認知能力の共通理解
- ・非認知能力を育成する各教科・学年での実践
- ・生徒の姿を見取り、共有する

↓ 実践の蓄積 ↓

【2年目】深化・焦点化

- ・特に伸ばしたい非認知能力を明確化
- ・主体的な活動の質を高める
- ・成果と課題を整理し、本校の実践としてまとめ・発表を行う

《研究を深めるための指導・助言をいただく講師陣》

【令和8年度】

辻本 昭彦先生

法政大学 生命科学部 生命機能学科 教授

東京都の中学校で長く教員を勤め、現在大学で理系の理科教育法、総合的な学習の時間の指導法、教育の制度と経営など教職課程を担当し、理系の専門性の高い実践的な教師を現場に送り出すことに従事している。サイエンスコミュニケーション論を中心に、理科教育DXと生成AI、SDGsなど理科が社会と向き合う授業、学び続けるための評価論、トランスサイエンス、誰でもできるサイエンスマジックなど教材論の研究を行い、全国各地で授業づくりの講演会や研修会に出向き、これからの理科の魅力を提案している。

中島 雅子先生

埼玉大学教育学部 教授

30年間公立高等学校の理科教師を務めたあと研究者となり、2015年より埼玉大学教育学部准教授、2025年より現職。研究テーマは、メタ認知、教師教育・教員養成、教育方法学、自己評価、OPPA（一枚ポートフォリオ評価）論、理科教育。OPPA論研究会会長。

5 研究を進める上で大切にすること

- ・ 正解を最初から求めない
- ・ 迷いや試行錯誤を価値付ける
- ・ 他者の実践から学び合う

👉 研究は

「評価されるもの」ではなく「育て合うもの」

6 今年度、全教職員が意識すること

- 教師の役割を「指導」から「見取り・評価」に移す
- 生徒が「主語」になる瞬間を意識して授業を見る
- 生徒の小さな変化を言葉にして共有する（記録）
- できることから、一つずつ試す

「0秒思考」 朝学習の時間を活用

「OPPA」 1枚ポートフォリオ評価 One Page Portfolio Assessment

学習活動 脱・教師主導一斉指導

学習過程（1時間の学習の進め方）の確認 自由進度学習 PBL

座席配置の工夫（一斉指導型からアイランド型へ）

特別活動・行事 生徒に企画・運営を「任せる」「委ねる」

生徒会活動 生徒の声を聴き、生徒自身による自治活動を推奨

生活指導 「どうしたの？」「どうしたいの？」「何か手伝えることはある？」

↓

これらの取組を通して、教職員の教育観のパラダイム・シフトを図る。（生徒の主体性を阻害・抑制してしまう指導・支援のあり方を見直していく。）